

足立政男著 『丹後機業史』

堀江保蔵

一 本書の目的

丹後機業とは、いうまでもなく縮緬機業であつて、それは今日、依然として峰山を中心とする丹後の生命線的な産業である。縮緬機業は、江戸時代中期に、京都から技法を伝えて桐生・岐阜・長浜・宮津・峰山などに発達したもので、丹後縮緬は浜縮緬と並んで、とくにその名を謳われた。本書は、江戸時代における丹後機業の全貌を明らかにした著述であつて、全篇六章から成る。

本書の目的は、著書によれば、第一に、徳川封建体制の崩壊並びに日本資本主義社会の発展を跡づけるため、地方機業として典型的な地位を占める丹後機業史の研究成果を取り纏め、世に紹介するにある。第二の目的は、丹後機業の体系的

・学問的研究にある。他の典型的な地方機業である桐生・足利・尾西等については、すでに学問的な調査研究がなされているにも拘らず、丹後機業については、東京税務監督局編

「丹後機業沿革調査書」(明治三八年)、京都府労働経済研究所編「丹後機業の構造分析」(昭和二八年)(その第二編)、岩崎英精著「丹後機業の歴史」(昭和二八年)および若干の雑誌論文があるにすぎず、しかも、体系的研究という点で遺憾なしとしなかつた。第三の目的は、これまた著者によれば、丹後機業に関する従来の捉われた、または誤まつた見解を是正するにある。捉われた見解とは、たとえばマニユファクチュア経営論であつて、著者はきつぱりとそれを否定し、問屋制家内工業の範疇を出でなかつたと断定する。また、誤まつた見解とは、たとえば宮津藩が縮緬機業を圧迫しつづけたとす

る説であつて、著者は明らかに藩が国産として保護育成策の対象としていた事実を掲げようとしている。

以上のような諸目的が本書でどのように到達されているか。まずその内容をやや詳しく紹介しよう。

二 本書の内容

全篇六章の第一は「丹後縮緬機業の創業と歴史的経済的背景」で、ここで著者は、農村工業が農家の副業から商人支配の問屋制家内工業へ進むことをもつて、反封建的工業へ一歩を進めたもの、すなわちこの経営形態は封建制末期・資本主義前期に見られる形態であり、日本にあつては江戸時代に明白に現われたものであるとし、この前提に立つて叙述を進めている。この前提について言うべき点があるが、あとに譲るとして、本章において注意すべきは、西陣機業に対する意味での地方絹機業の勃興の原因が、一つには製品の大衆性に、二つには農村生活の困窮に、三つには西陣機業に大打撃を与えた西陣焼け（享保十五年）にあつたとしてゐる点である。とくに第二の原因、すなわち農家が租税の重課にもとづく生活難を商品化工業によって打開しようとしたことが、

農村工業勃興の一般的原因であつたことは、広く認められてゐる事柄であるが、本書では、加悦（宮津領）・峰山両地方について、それがいわゆる僻地に属し、農耕のみによる生活がいかに困難であつたかが示されている。

第二章、丹後縮緬機業の発展過程。以上のような事情で興つた縮緬機業は、年を追うて機数が増加した。しかし、機屋自体が全く農業から足を洗つた専業者ではなかつたから、自然、機業は一〇二台の零細経営で、それ以上の機台を持つ機屋も、一〇二台を外へ出しているのがふつうであつたと著者はいう。右の点で、著者の主張は、縮緬機業は百姓の農間副業の段階を越えて専業化したとする「丹後機業の構造分析」の記述と異なつてゐるが、これは重要な点である。進んで著者は出機について掛機（親方・子方関係）と歩機（手間賃経営）に分けて詳説し、出機経営に糸屋や絹屋が問屋資本として進出してきたこと、それに伴つて生じた生産過剰や手間賃の賤貴に対して、自営の機屋がどのように対抗し、また藩がどのように対処したかなどを生き生きと描いている。

以上を通じて、著者は、機業が貧農層の農閑余業であつたとする立場を一貫して取り守つてゐるが、それは機屋の経営

資本が問屋からの借金で賄われていたとの説明、機屋の消長がめまぐるしかったとの説明にも示されている。しかし、著者によれば、このかわい機屋のあいだにも株仲間が組織されて、強い団結力を保持していた。機屋仲間は、宮津藩では宝暦三年に、峰山藩では同五年に成立し、数年後にそれぞれ公許を得たが、それは他の株仲間と同様に、業者からみれば仲間を統制する共同組織であり、藩からみれば徴税を確実にするための組織であった。そして藩は常に自営機屋を擁護する立場をとっていたと説明されている。

第三章、藩政に現われた機業政策。本章は、宮津藩の機業政策と峰山藩の機業政策との二節に分説されている。その第一節の冒頭に、宮津藩が機業のために計ったことは皆無にひとしく、運上や献金の徴収と商業資本との結託による搾取とに終始したとする岩崎氏の所説（『丹後機業の歴史』）を掲げ、それに反駁する建前から、農業維持の必要上行なった機業制限政策を掲げたのち、保護政策に多くのページを割き、機株仲間の創設、掛機・歩機・隠機の禁止、京問屋設立の公許、京都絹問屋の横暴に対する弾圧策、三領（宮津・峰山・久美浜）合同の丹後国産会所の設立、産物御改法の施行、生産の

調節と融資、その他の保護育成策の順序で細かく説明する。

そのうち、機株仲間の創設の意義は前述の如くであり、掛機・歩機の禁止は重要な面において自営機屋の維持・保護策であり、京問屋の設立公許は機屋を問屋商人の収奪から守ることを主としており、糸問屋に対する政策は原糸の供給を確保するためのものであった。また国産会所の設立、産物御改法の施行は、全機屋・糸仲買人・縮緬仲買人を藩の支配下におさめることによって、財政収入の増加をはかると同時に、機業を保護することを目的としたものであった。そのほか、藩は不況時に融資を行ない、また縮緬製織技術が他国に伝わって領内機業に打撃となることを恐れ、織工の他国出稼ぎを禁止した。これらの諸政策を通覧すると、藩の保護政策は、決して機屋の立場に立つて行なわれたものでなく、ひとえに藩の立場から行なわれたものであったようにみえる。そしてそのこと自体、当時が領主の立場を第一義に考える封建制度の時代であった以上、何ら不思議はないし、また、宮津藩だけが例外であったわけでもない。したがって、これによって岩崎氏の所説を十分に反駁することができたとしても、藩の政策が縮緬機業の近代化へ向っての進歩にプラスになったか、

マイナスになったかという点に、依然として問題が残るので
はなかりうか。

峰山藩の保護政策については紹介を略する。

第四章、丹後縮緬の流通形態。本章は丹後縮緬市場の成立
と展開、丹後縮緬の取引形態、闇取引とその禁止、飛脚制度
の四節から成り、製品の主要販路であると同時に原糸の主要
供給地であった京都との取引関係が主題とされている。

その第一節では、まず京都問屋の成立と発展を掲げ、つぎ
に地方機業の興隆によってその地位を脅かされるに至った西
陣と丹後との抗争を舞台に登せて、西陣機業が糸問屋に丹後
への原糸供給を止めさせたことが、結局、西陣機業自身の首
を締める結果になったとし、この点で、著者は、丹後機業が
京都の糸屋に屈服したとの「構造分析」の記述が間違ってい
ることを指摘している。進んで著者は、丹後機業が藩の後楯
によって、縮緬販売について独占力を振おうとした京都問屋
に対し、最後まで抗争したこと、京都の問屋に取って代って
糸の供給、製品の販売を独占しようと企てた丹後の商業資本
家に対しても同様に抗争したこと、商人化することによって
縮緬収益を独占しようとした藩庁に対しても頑強に闘って最

後の勝利を収めたこと、などを掲げている。

ここで疑問となるのは、主として貧農の農閑余業にすぎな
かった縮緬機業の力が、どうしてそのように強かったのかと
いうことである。ことに最後の領主の商人化は領主と地元商
人との結合によるところであって、具体的には前掲の丹後国
産会所の設立であり、産物御改法の実施であった。そしてそ
れらは、前には機業保護政策のうちに掲げられ、ここでは藩
と地元商人との結合による収奪策として掲げられている。そ
の矛盾は楯の両面として受取ることもできるが、それにし
ても、藩と商人との結合による企てに対して、それをはねかえ
す力がどのようにして機屋に貯えられたのかの疑問は、依然
として残るであろう。

それはともかく、第二節では改めて京都問屋の機能を述べ
て、丹後機業がそれから離れなかったこと、同時にそこ
には弊害も存したことを掲げ、進んで取引の態様や値引習慣を
説明しているが、興味深いのは最後に掲げられた飛脚制度で
あろう。これは糸を持下り、および縮緬を持上る運送業者で
あって、兼ねて代金の授受にも一役買っていた。そして市況
に明るいところから、ややもすれば機業家若しくは問屋にな

ろうとする傾向があったが、機屋は極力その現実化を防止したと論じられている。

第五章、在方商業利貸資本家の出現と機業支配形態。本章では地元の間屋による機業支配の実態が述べられている。著者によれば、機屋と密接な関係を持つ商業資本家は地元と京都の糸間屋および京都の絹間屋であるが、後者は地理的關係から、その機屋支配は株仲間組織による販売独占・地売禁止・内銀賃租代納による金融的圧迫などの間接的支配形態をとったにすぎず、機屋を直接支配するに至ったのは地元の糸間屋だったのである。

こうして、著者は機屋が商業資本に依存せざるを得なかった事情を繰返し説明したのち、まず、機屋に対する地元糸間屋の吸着と支配の状態を多くの借用証文によって説明し、つぎに彼らの糸および縮緬仲買に対する同様の関係をみ、進んで間屋ないし織元が経営する歩機あるいは掛機の実体に言及する。間屋による機屋支配の具体的内容は、この最後の点に見られるのであるが、それが盛んになれば、自営機屋に大きな打撃となるので、後者はその禁止を請願し、藩は前述のように町人所有の歩機・掛機が在方へ進歩するのを禁止する措

置を講じた次第である。以上の叙述よりも、ここで興味を持たれたのは有力な地元間屋がどのような事情で現われたのかということであって、著者はその出自を岩滝町や浅茂川町の廻送業者に求めている。そしてまた、これらの商人が、とくに天保年間以後、生糸を遠く奥州から取寄せるようにして、京都糸間屋の地位を低くしただけでなく、縮緬の販路を直接に北陸方面にまで開拓して行った状態を描き、ことにこの点は著者の新発見であることが付言されている。

第六章、原料生糸の市場と取引形態。丹後に絹機業が起った事情の一つは、そこがかなりの生糸産地だったことであるが、縮緬機業が盛んになるにつれて、価格の点で他国糸が多く用いられるようになり、質の点では奥州糸がすぐれていた。本章は、この原料生糸の取引関係を主題としたもので、まず、機屋が在地糸間屋および京都糸間屋から直接に糸を買っていた状態のもとにおいて、どのように商業資本的圧迫を蒙ったかを述べ、つぎに機屋と間屋の中間に糸仲買、さらには糸仲買手先人が介入して来た事実を掲げ、最後に、他領糸間屋たとえば近江商人が入りこんで、地元の糸屋あるいは機屋と結託して盛んに掛機を経営し、その製品を京都や大阪へ売捌い

て利益を壟断し、もって自営機屋の経営を危機におとしれたと論じている。

三 若干の評言

以上、ところどころに疑問点を挿入しながら、大略本書の内容を紹介した。ここで若干の評言をまとめて掲げよう。

第一、本書の内容を一つの劇にたとえれば、主役は自営の縮細機屋であって、その機械業は農閑余業である。土地柄、農業だけでは生活ができないが、さりとて機屋に專業化することもできない。しかも機業が商品産業として興ったものであるから、当然に糸問屋または縮細問屋の資本的支配を受ける。問屋制家内工業が商業資本による生産の支配を意味するとしても、それは必要悪として肯定されざるを得ない。その上にさらに藩主が乗りかかっている、一方で農業維持の必要から機業を保護しながら、他方で機業を直接・間接に収奪しなければならぬ財政的事情のもとに置かれている。

このように、経済的・政治的の「がんじがらみ」にされているかまわい機屋が、ときには問屋の策謀をねかえし、さらに領主の権取強化策をも水泡に帰せしめる。そこで、どうして

そのような力を貯えることができたのかという疑問が、本書を通読したのちに、依然として残る。株仲間組織によって、あるいは領主の庇護によって、そのような力を持ち得たのか、それとも資料には現われないエネルギーの貯えがあったのか、その辺について何らかの説明がほしかった。

第二に、本書では、機屋の経営は常に苦しく、ときには二進も三進もいかぬ状態であったと書かれており、それとバラレルに、縮細機業が逐年発展したとか隆盛に赴いたとか書かれている。そこで尋ねたいのは、その「発展」あるいは「隆盛」の具体的内容いかんということである。発展とは単に機数・生産高などの増加だけのことなのか、自営機屋の勢力の増大、もしくは反対に問屋資本の勢力の増大のことなのか、などを示してほしかった。そのためには経営史的研究が必要であり、経営史的に研究するには資料的条件の整備が前提となるのであって、おそらくそのような資料の欠如が、著者に経営史的研究を不可能にしたものであろう。

第三は、本書において著者が意図した第一の目的が到達されているかどうかの点である。すなわち、徳川封建体制の崩壊並びに日本資本主義社会の発展を跡づけるために丹後機業

が取りあげられたのであるが、本書には遺憾ながら結論がないので、果して右の跡づけが成功的になされているかどうか、読者の印象にまつ以外に道がない。それと、本書では、明治維新以後の状態については参考材料程度にしか触れられておらず、この点からも同じことがいえるのである。

そこで、筆者の印象を掲げるならば、農業の余暇を利用して副業的に営まれる家内工業生産の段階が封建的であり、それが商業資本に支配されて、そこに資本による手工業経営、経営者と賃労働者の発生という資本主義的組織の前期的形態ができ、これによって反封建的工業へと一步を進めたことになるというのが、著者の主張のようである（本書四頁）。これは確かに一つの見方である。しかし、丹後の縮緬機業は出発早々から問屋制家内工業であったようであり、またその問屋の勢力には、京問屋に加えて、地元問屋・他領問屋の勢力がしだいに及んできた。したがって資本主義的組織の前期的形態がすでに早くから現われていたわけであるが、反面に自営機屋の力は最後までこれらの勢力をはねかえすことができるとは強かった。その力の背後には封建領主の保護ということがあったわけであるが、その領主自身がのちには商業資

本家として機屋の上に君臨しようとした。そうなる何が封建的で何が反封建的なのか、判定に苦しむざるを得ない。この点を明確にしてくれるものも、一つは経営史の見方であり、他は徳川封建制度が無くなったのち、すなわち明治維新後の状態についての研究ではなかるうか。

以上、本書に対していろいろの注文をつけたが、これは実はわが国の経済史研究の一般的な状態に対する私の注文なのである。具体的にいえば、わが国の経済史と称するものは、実質的にはむしろ社会史に近く、また維新前の研究に重点が置かれていて、現代との間の断層を埋める努力に乏しい。著者は私の知友なるが故にこそ、この紙面を借りて、あえて多くの注文をした次第であって、本書そのものは、それとして多くの価値を持っている。その主なものは、冒頭に掲げた著者の第二、第三の目的がよく到達されていることであって、本書の出現によって、江戸時代の丹後縮緬機業の発展の全貌が体系的に明らかにされ、取りまとめられたことは、学界のたぬ慶賀すべきであらう。（一九六三年十一月、雄渾社刊）